

ルイセンコ覇権に抗して  
—ソ連邦科学アカデミー・シベリア支部・  
細胞学=遺伝学研究所の設立をめぐって—

市 川 浩

広島大学大学院総合科学研究科

**Against Lysenkoites' Hegemony:  
On the Establishment of the Institute for Cytology and Genetics of Siberian  
Branch of the USSR Academy of Sciences.**

Hiroshi ICHIKAWA

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

**Abstract**

The coincidence of Lysenkoites' hegemony and the rapid rise of molecular genetics and cytology in the second half of 1950s in the Soviet Union had been explained mainly in the context of the course of events in Soviet agriculture, or as a result of the maneuvers or the spontaneous movements of Soviet scientists trying for the ruling power upon their own field of science or the freedom of their research. Through the careful survey of the minutes and the stenographic notes of the Presidium meetings of the USSR Academy of Sciences and the documents kept in the Scientific Archive of Siberian Branch of the USSR Academy of Sciences, the author tries to explain that coincidence from the view-point of the Cold War; the research concern had to be concentrated in the development of the research upon "effect of radiation on living bodies".

**はじめに**

植物を一定期間低温にさらすことでその開花時期を変化させる春化处理（ヤロヴィザーツィヤ: яровизация）の成功をもって、遺伝的性質が環境操作によって変化するものと見なし、メンデル遺伝学を否定したトロフィム・ルイセンコ（Трофим Денисович Лысенко : 1898-1976）の学説はスターリ

ン政権公認の学説となり、それに反する立場をとった科学者はパージされ、ルイセンコとその支持者たちの覇権は、庇護者ニキータ・フルシチョフ（Никита Сергеевич Хрущёв: 1894-1971 : 1953-1964, ソ連邦共産党中央委員会第一書記, 1958-1964, ソ連邦首相）が失脚した翌年の1965年まで四半世紀ほど続いた。

しかし、その間、第2次世界大戦直後の一時

期、および1950年代の半ば、この覇権が大きく揺らいだ時期があった<sup>(1)</sup>。2回目の危機は、言うまでもなく、スターリンの死と第一副首相兼内相ラブレンチー・ベリヤ（Лаврентий Павлович Берия: 1899-1953）逮捕の後、ソ連邦のインテリゲンツィアを包み込んだ一種の解放感が背景となっていることに間違いはなからう<sup>(2)</sup>。ルィセンコ覇権の確立・展開・終焉に関する詳細・大部な研究を発表したヴァレリー・ソイフェル（Валерий Николаевич Сойфер: 1936-）は、この時期のルィセンコ派凋落の直接の原因について、戦後新たにルィセンコ自身が打ち出した“有機-鉱物複合体”説、すなわち、微生物が植物による鉱物性栄養の吸収を媒介しているとする仮説とそれにもとづく“有機-鉱物複合”肥料の推奨が、1954年の追試における惨憺たる結果によって否定されたことにあるとした。これがため、ルィセンコの権威は著しく低下し、1956年4月にはレーニン名称全連邦農業科学アカデミー総裁の地位を追われるまでになったとする<sup>(3)</sup>。

他方、深刻な農業危機に直面したフルシチョフは、安上がりな農業生産の向上策を次々と提案していたルィセンコの農学に期待し、1957年春にはルィセンコ支持を鮮明にし、その後権力の側からの科学への介入が続くことになった（後述）。その最たるものが、1959年6月29日ソ連邦共産党中央委員会総会におけるフルシチョフによる、ルィセンコの最大の反対者であった遺伝学者ニコライ・ドゥビーニン（Николай Петрович Дубинин: 1907-1998）にたいする名指し批判であった<sup>(4)</sup>。

しかし、そのドゥビーニンを長とするソ連邦科学アカデミー・シベリア支部・細胞学=遺伝学研究所は、ルィセンコがふたたび政権の支持をえた1957年に設立されている。しかも、後述するように、その規模はたいへん大きく、ルィセンコ派はこの研究所の活動にしばしば妨害を試みるが、その拡充・発展は止まらなかった。

なぜ、この研究所の設立はルィセンコの覇権と両立しえたのであろうか。ソイフェルは“フルシチョフ時代の複雑さ”にその要因をもとめている<sup>(5)</sup>。すなわち、フルシチョフ時代、権力はスターリン時代に引続きしばしば科学に介入したが、ス

ターリン批判を経た段階では、もはや過去への逆戻りはありえないと考え、科学者はみな安心して多様な方向性に向かっていった、という。

1950~60年代に著しく進展した“サイバネティクス”化を科学者による社会革新運動ととらえ、ソヴィエト科学史研究にたいする新鮮なアプローチを提示し、世界的に注目されたスラヴァ・ゲローヴィッチ（Slava Gerovitch: 1963-）は、ふたりの生物学を志望する娘をもった数学者、アレクセイ・リャプーノフ（Алексей Андреевич Ляпунов: 1911-1973）の役割に注目する。リャプーノフはドゥビーニンなどの生物学者を招き、娘のために家庭内学習サークルを開いているうちに、生物学の正常化、すなわちルィセンコ派による“真理の独占”を打破することがソヴィエト科学全体の課題であると確信し、反ルィセンコ運動に立ち上がる。その成果のひとつが、最終的には297名の科学者の連署をもって党中央委員会幹部会宛に生物学正常化を訴えた、いわゆる「300人の手紙」であった<sup>(6)</sup>。ゲローヴィッチは、こうした幅広い科学者の生物学正常化をもとめる“社会運動”が底流にあって、ドゥビーニンを長とする研究所の設立・拡大をはじめとする事態の積極的な転換を準備したと考えている。

この研究は、ジョレス・メドヴェージェフ（Жорес Александрович Медведев: 1925-）の衝撃的な著作『ルィセンコ学説の興亡』（1969年）<sup>(7)</sup>以来、すっかり定着してしまったかのように思えたソヴィエト科学観、すなわち、ソヴィエト科学を全体主義国家のもとにおける党・国家統制の犠牲者として描く見方にたいして、ソ連邦解体後新たに公開された文書記録を資料的基礎としつつ、科学者がときとして事態の転換をもたらした点に注目し、その主体的な側面を重視する、新しいソヴィエト科学史の見方<sup>(8)</sup>に沿うものであり、高い説得力をもっている。

しかしながら、ソ連邦科学アカデミー・シベリア支部・細胞学=遺伝学研究所は、その名のとおり、ソ連邦科学アカデミーという公的機関にして、高度な自治を確保していた機関によって設立・拡充されたものであり、その運営と活動は直接には、モスクワの科学アカデミー本体にたいして相対的

な独立性の高かったソ連邦科学アカデミーのシベリア支部によって管理されていた。このことを考慮に入れたとき、この研究所の設立・拡充について、科学アカデミーのなかでどのように議論されてきたのかをまず検討する必要があるのではないだろうか。本稿はこうした制度論上の視点から、ソ連邦科学アカデミーの最高議決機関である総会の常設機関として活動の基本的な方向性を決めていた幹部会（Президиум）の議事録・速記録、およびソ連邦科学アカデミー・シベリア支部の諸資料から、この問題、すなわち、ルイセンコ覇権の復活と反ルイセンコ派生物学の新たな研究拠点の設立・強化の同時併存の要因に迫ってみたい。

戦後、ソ連邦科学アカデミー幹部会の会議の場において遺伝学、あるいはより広く生物学が議論の焦点となったのは、旺盛に進められた核開発に伴い、「放射線の生体におよぼす影響」が科学研究の重要課題となったことに関連している。以下では、まずこの点を確認し、当該研究所の設立の経緯、続いて、ルイセンコ派の妨害とその帰着点について検討してゆきたい<sup>(9)</sup>。

## I. 「放射線の生体におよぼす影響」研究

ソ連邦は1949年8月29日のその初めての原子爆弾 P Д C-1<sup>エル・デー・エス</sup>の爆破実験成功から、1953年8月12日、初の水素（熱核）爆弾 ПДС-6 の実験成功まで、きわめてわずかな期間に核兵器開発に成功した。その後、ソ連邦は一方でアメリカの核戦力に対抗して大量の核兵器の製造・蓄積をすすめるとともに、他方で対米プロパガンダの性格を持つ「原子力平和利用」キャンペーン<sup>(10)</sup>を展開し、国内外の世論形成をめざすことになる。こうした路線の上に、1955年7月1~5日、ソ連邦科学アカデミーは大規模な学術会議＝「原子力の平和利用セッション」を開催し、5巻からなる報告書を刊行した<sup>(11)</sup>。

ここで注目されるのが、この「セッション」において、生物学の分科会が特に設置され、生体にたいする放射線の作用を中心とする研究結果が数多く報告されたことである。分科会の冒頭、高名な生理学者で科学アカデミー生物学部に多大の影響を有していたレオン・オルベリ（Леон

Абгарович Орбели: 1882-1958）は、「平和目的か、またはその他の目的で原子エネルギーの研究と利用が行われているかには関わりなく、このエネルギーは人間および生体に影響を与えるのである」<sup>(12)</sup>と述べ、核時代における放射線の生物学的研究の重要性を指摘した。

この「セッション」の直後の8月8~20日、ジュネーヴで開催された「第1回原子力平和利用国際会議」にソ連邦は大規模な代表団を派遣した。この会議において、ソ連邦代表団は、その前年の1954年6月27日に運転を開始した世界最初の原子力発電所＝オブニンスク原子力発電所の“成果”をしめし、参列者を驚嘆せしめたものの、自分たちの立遅れを自覚することにもなった。帰国後、9月30日に開催された科学アカデミー幹部会で彼らはジュネーヴでの見聞の結果を報告するなかで、自分たちの研究が「とても質の高い科学者がとても小さいグループによって（冶金学者アレクサンドル・サマーリン－Александр Михайлович Самарин: 1902-1970－の発言）」成し遂げたもので、英米の“ビッグ・サイエンス”に遙かに及ばないものであることを思い知らされたとしている<sup>(13)</sup>。翌年、6月15日と22日、2回の幹部会の会議で、1956~1960年、5年間の科学アカデミー・物理学＝数学部の包括的で大規模な原子力研究計画が審議され、承認された。同時に、一連の研究所の増員・資金増大措置が決定されたが、その一環として生物物理学研究所に放射線遺伝学研究室を設置することも決定された<sup>(14)</sup>。

ビキニ事件以降、放射線の生物への影響問題が国際政治上の焦点となった<sup>(15)</sup>が、ルイセンコ覇権下のソ連では、この分野の研究は立ち遅れていた。そもそも、このような研究のための放射性同位体元素利用の条件が備わっていなかった。1957年9月9-20日にパリで開催された「科学研究への放射性同位体元素応用に関する国際会議」について、11月29日の幹部会の席上、報告にたった、科学アカデミー主任学術書記、アレクサンドル・トプチエフ（Александр Васильевич Топчиев : 1907-1962 : 1949~1959, 科学アカデミー主任学術書記。その後副総裁）は、「国産の放射線測定器、放射線量計、および電子物理的機器はその品種と品質の点で、

また、たびたび、技術的性能の点で、同位体と核放射線の利用を伴う研究にふさわしい水準に達していません。同位体や核放射線を扱う労働者のための防護設備や防護服がないために、いろいろな省や官庁の多くの研究室は、現在、国家衛生監督局により閉鎖されています」と述べている<sup>(16)</sup>。さらに、電子顕微鏡の利用でも大きな立遅れがあった。1957年12月6日の幹部会では、「基本的な生物学的諸現象の構造的・物理=化学的基礎」を解明する諸研究の強化策が審議・決定されたが、その報告にたったグレブ・フランク（Глеб Михайлович Франк: 1904-1976, 生物物理学者。ノーベル物理学賞受賞者のイリヤ・Илья, 1908-1990 -の兄）は、「わたしたちは、生物の組織の分子構造を分析する研究の広範な戦線で立ち遅れています。すでに述べたように、世界の諸雑誌には電子顕微鏡の分野で、およそ1,000件の研究が発表されているのに、われわれはまだ10件にも達していません」と述べている<sup>(17)</sup>。

前年の秋、科学アカデミーは総裁選挙の時期を迎えたが、そのために1956年10月10日招集された物理学=数学部総会で、5名の高名な物理学者、すなわち、イーゴリ・タム（Игорь Евгеньевич Тамм : 1895-1971 : 1958年、ノーベル物理学賞受賞）、ピョートル・カピッツァ（Пётр Леонидович Капица : 1894-1984 : 1978年ノーベル物理学賞受賞）、レフ・アルツィモヴィッチ（Лев Андреевич Арцимович : 1909-1973）、グリゴリー・ランズベルグ（Григорий Самуилович Ландсберг : 1890-1957）、およびミハイル・レオントヴィチ（Михаил Александрович Леонтович : 1903-1981）が共同である提案をおこなった。彼らは、ドゥビーニンを長とする新しい遺伝学研究所がいまだに創設されていないこと、現職の科学アカデミー総裁で、この時点で唯一の総裁候補だったアレクサンドル・ネスメヤノフ（Александр Николаевич Несмеянов : 1899-1980 : 1951-1961, 科学アカデミー総裁）が生物科学の状況に根本的な変化をもたらしていないこと、などを理由に、ネスメヤノフが年次報告と綱領的な方向性をしめした演説をおこなう翌年2月の年次総会まで総裁選挙を延期すべきだと提案したのである。この提案は幹部会の段階で否決された<sup>(18)</sup>が、核軍拡の激化と分子生物学

の爆発的な発展（後述）を背景に放射線生物学の研究が重要性をますます高める状況において遅々としてすまないその研究基盤整備にたいする物理学者の焦燥を物語るできごとでもあった。

物理学者のこうした異議申し立てが功を奏したのか、1957年3月29日、科学アカデミー幹部会は、放射線生物学（とりわけ放射線遺伝学）、生物物理学の諸問題、およびアイソトープの化学・物理学研究の飛躍的發展を目的に、一挙に放射線細胞学、一般生物物理学、アイソトープ研究の3分野の研究をおこなう研究所を新設する決定をおこなった<sup>(19)</sup>。審議の途上、カピッツァは「わたしはまったく遠慮せずに率直に言わなければならないと思います。将来の戦争は、それが実際に起ころうと起こるまいと、ほかの誰でもない、生物学者が勝敗を決めるのです。今、この問題、つまり、核戦争の帰結がどんなものになるかという問題を定めるのは物理学者ではない、生物学者です。わたしたちはここにびくびくしながら残っていました。まったくびくびくしていた。これらの問題を他の問題と混同してはなりません。わたしたちにはこのような遺伝学研究所、放射線遺伝学研究所が必要です。…（中略）… どんな方法を使ってもこのような研究所をつくらなければならない。これがわたしたちの今日的課題です。わたしたちはこの課題をできるだけ早く解決しなければなりません。今までのようにぐずぐずしてはなりません」<sup>(20)</sup>とアカデミー幹部会員たちに熱く訴えかけた。

早くも4月26日には生化学者ヴラジーミル・エンゲリガルド（Владимир Александрович Энгельгардт : 1894-1984）を所長職務代行として、ソ連邦科学アカデミー・放射線・物理学=化学生物学研究所（Институт радиационной и физико-химической биологии АН СССР : 「放射線」と「物理学=化学」がともに形容詞として「生物学」にかかっている - 筆者）が設立された。設立にあたっては、政府の原子力工業総管理部（Главное управление атомной промышленности）が計画に加わり、研究所の建物、敷地の選定・準備も同総管理部と科学アカデミーが共同でこれにあたった<sup>(21)</sup>。

しかしながら、この研究所は1年以上経った

1958年5月の段階でもまだ始動していなかった。その直接の原因は必要な面積がまだ確保されていなかったことにあったが、5月16日に開催された幹部会の席上、エンゲリガルドは、「[生物科学-引用者]部の諸機関における作業面積に関する尋常でない状況は、生物学の遅れている諸分野の研究強化を阻害し、諸機関の活動の生産性を低めています。とくに放射線遺伝学研究室と蠕虫学研究室の作業面積の状況は耐え難いものです。アイソトープを受け入れる特別な面積が生物科学部の諸研究所に欠けているがために、その研究はふさわしい条件ではおこなわれず、一再ならず地域の衛生監督部局に禁止されています」と報告している<sup>(22)</sup>。審議では、その原因として生物科学部の意志決定の問題点が浮かび上がった。V.S. ルシーノヴァ (В.С. Русинова: 名・父称, 伝記的詳細不詳) は「生物科学部ビューロー (ビューローについては後述) のメンバーがたいへんな数のオブリゲーションを負っていて、職務が過剰になっていることが生物科学部の活動に反映されています。通常、ビューローの会議にはその構成員の半分、つまり5、6人、ないしそれ以下の人しか来ません。生物科学部の科学組織活動の欠陥は一連の生物学の最重要問題で最近大きな議論がなされていないことにあります」と述べたが、副総裁コンスタンチン・オストロヴィチャーノフ (Константин Васильевич Островитянов: 1892-1969. 経済学者. 1953-1962, 科学アカデミー副総裁) は「広範に物理学的・化学的な方法を応用しなければならない新しい方向性にたいして、生物学の諸分野に象徴的に反映されているような、ある種の反対がある、ということです」と、ルイセンコ派の妨害を示唆している<sup>(23)</sup>。

その間、1958年1月31日には、この分野の抜本的強化を目指して、幹部会に“放射線生物学委員会”が設けられることとなった。同委員会は、アナトリー・アレクサンドロフ (Анатолий Петрович Александров: 1903-1994, 原子核物理学者. 1975-1986年, 科学アカデミー総裁)、イーゴリ・クルチャートフ (Игорь Васильевич Курчатov: 1903-1960, “原子力のツァーリ”とも呼ばれたソ連邦原子力開発計画のリーダー)、オルベリ、セミヨノフ (前出, 注14)、タム、エンゲリガルド、ドゥビーニン、グレブ・フラン

クなど25名の委員で構成され、科学アカデミーで実施される“生体と遺伝への核放射線の作用”に関する一切の研究をコーディネートする権限を与えられた<sup>(24)</sup>。

## II. “ニコライ・ドゥビーニンの研究所”

1957年6月21日の科学アカデミー幹部会で、ついに科学アカデミー・シベリア支部の設置が最終決定された。同時に、ドゥビーニンはシベリア支部・細胞学=遺伝学研究所の「所長兼組織者」という役職に任命される<sup>(25)</sup>。これからできる研究所のための人選や課題設定に大きなフリー・ハンドを与えられたのである。ドゥビーニンは、幹部会の席上発言に立ち、「今や、放射線生物学研究所 [先述の放射線・物理学=化学生物学研究所のこと-引用者]の組織に関する重要問題が提起されると同時に、放射線遺伝学の研究は大規模に発展しはじめます。そして、このことは未来の研究所にとって大きな意義を有しています」<sup>(26)</sup>と述べ、自身を長とする新しい研究所にたいする期待が放射線遺伝学の急速な発展にあることを認めている。

この幹部会の決定を追認するために1957年7月2~6日招集された科学アカデミー総会で、新たにシベリア支部長となる、数学者にしてエネルギーギッシュな科学行政家ミハイル・ラヴレンチェフ (Михаил Алексеевич Лаврентьев: 1900-1980, 1957-1975, 科学アカデミー副総裁兼シベリア支部長) は、細胞学=遺伝学研究所は全職員400名、作業面積5,000m<sup>2</sup>におよぶ巨大研究所になるであろうと述べた<sup>(27)</sup>。

しかし、すでにこの時点で明らかであったが、ドゥビーニンらは、「放射線の生体への影響」研究に限らず、幅広く最新の生物学に関する基礎研究を展開することを望んでいた。1953年、ジェームズ・ワトソン (James D. Watson: 1928-) とフランシス・クリック (Francis H.C. Crick: 1916-2004) によるデオキシリボ核酸 (DNA) の二重螺旋構造を解明した論文の登場など、西側諸国では分子生物学的研究が爆発的な勢いで進展しつつあった。ソ連邦の生物学者にとってこれは拱手傍観してよい問題ではなかった。物理学的、化学的要素の

強い分子生物学は「放射線の生体への影響」研究にとっても有効であったが、彼らは、それ以上にこの段階でも“遺伝の物質的基礎”論を激しく排斥する（これについては後述）リュセンコ派による“真理の独占”によって抑圧されていたソヴィエト生物学を、西側における分子生物学の急速な発展に一挙に追いつかせるために、広範な基礎研究の課題を大規模、かつ急速にすすめる必要があると考えていた。ドゥビーニンにとって最初期から100名の職員をもってスタートした研究所でも規模過小であった<sup>(28)</sup>。1958年5月15~19日に開催されたシベリア支部第1回総会で彼は「現状の生物学研究の組織に満足することはできないと思います」と不満を明らかにし、現状の立遅れ克服のために「シベリア支部幹部会は専門を明確にした生物学施設の創設という課題を前進させつつ、この原因に関する意見の交換を科学アカデミー・生物学部との間で行い、その結果シベリアに10カ所の生物学研究の機関を創設するという生物学部の布告が出されました」と、交渉の成果について述べた。ついで彼は「現在、遺伝の問題と全体としての生物学は特別の意義をもっている時代を生きています。核タンパク質というかたちで遺伝の分子の基礎が明らかにされ、そのうえ、核酸こそ遺伝現象に何よりもまず結びついた化合物であるとみなす根拠は完全に存在しています」<sup>(29)</sup>と新しい研究の方向性にたいする期待を表明した。

生物学のほぼ全領域にたいする関心は、ドゥビーニンの研究所の構成にも現われていた。1958年12月12日付の報告<sup>(30)</sup>によれば、研究所は6科23研究室から成っていた。すなわち、(1) 遺伝の物理的・化学的・細胞学的基礎科に、1) 遺伝の細胞学的基礎研究室、2) 核酸・核タンパク質研究室、3) 分光光度測定・電子顕微鏡研究室、4) 植物細胞発生学研究室、5) 科学的顕微鏡撮影法研究室、(2) 一般・放射線遺伝学科に、1) 一般遺伝学研究室、2) 個体群遺伝学研究室、3) 放射線遺伝学研究室、4) 細胞遺伝学研究室、5) 動植物倍数体研究室、6) 一般遺伝学的育種法研究室、(3) 植物遺伝学・細胞学科に、1) 放射線育種学・突然変異の実験的発現研究室、2) ヘテロシス・交雑研究室、3) 植物細胞学・アポミクシス研究室、

(4) 動物遺伝学科に、1) 動物個体遺伝学・細胞学研究室、2) 動物ヘテロシス・交雑研究室、3) 動物育種学の遺伝学的基礎研究室、4) 動物生化学的遺伝学研究室、(5) 癌遺伝学・細胞学科に、1) 癌遺伝学研究室、2) 癌細胞の細胞学研究室、(6) 微生物・ウイルス遺伝学・細胞学科に、1) ウィルス・バクテリオファージの遺伝学・電子細胞学研究室、2) 菌の細胞遺伝学研究室、3) バクテリア遺伝学・細胞学研究室が置かれた。

### Ⅲ. リュセンコ派の妨害と“ドゥビーニンの研究所”

#### (1) リュセンコ派の妨害

リュセンコは農業科学アカデミー総裁の地位を失ったときですら、反対派牽制の目的で権力への働きかけを諦めてはいなかった<sup>(31)</sup>。ふたたび権力の支持をえると、反対派への妨害を強めた。1957年4月19日付の科学アカデミー総裁ネスメヤーノフ宛書簡では、「アイソトープと核放射線を応用して実施されている、もしくは実施が予定されている科学研究活動が、…(中略)…なぜか遺伝学研究所〔リュセンコを所長とする科学アカデミー・遺伝学研究所(モスクワ)のこと-引用者〕以外の人たちの指導のもとに置かれている」状況を激しく非難し、「遺伝学研究所で実施しているテーマから、架空の指導者たち〔こうした表現で、リュセンコは自身の研究所以外の“指導者”の存在を否定しているのである-引用者〕を外す指示を出してほしい」<sup>(32)</sup>と訴えた。リュセンコによれば、「遺伝学研究所のなかでは放射線作用の遺伝学に関する研究はみごとに組織されており、それらはミチューリン生物学の立場からおこなわれている」<sup>(33)</sup>のであった。つづいて、10月8~14日、リュセンコの遺伝学研究所は、250の学術機関、高等教育機関から375名を集め、「10月大社会主義革命40周年記念・動植物・微生物の遺伝性と可変性に関するコンファレンス」を開催した。その党中央委員会科学課にたいする報告によれば、席上、リュセンコの“副官”とも呼ぶべきニコライ・ヌージン(Николай Иванович Нуждин: 1904-1972)の発表によって、「遺伝の染色体理論と遺伝子学説は唯物論的な観点と

するどく対立するものであることが明らかにされた」ということになる<sup>(34)</sup>。

やや時期が下り、次節で述べる党中央委員会“生物学委員会”の科学アカデミー・シベリア支部尋問のあとのことになるが、農業科学アカデミー通信会員で全連邦植物栽培研究所所属のI.S. シゾフ (И.С. Сизов: 名・父称, 生没年不詳) 教授という人物が、1959年8月7日付で「ノヴォシビルスクに細胞学=遺伝学研究所は必要か?」と題する投書を党機関紙『プラウダ』編集部に寄せた。このなかで、シゾフは「...遺伝学・細胞学研究のこのような力の分散は合目的であろうか。この研究を遺伝学研究所に集中したほうが合目的であろう。科学アカデミー・生物学部の働き手のなかにはT.D.ルイセンコが行っている遺伝学のミチューリン的方向性が気に入らないひとが何人かいるらしく、ノヴォシビルスクに科学における方向性が真逆の、類似したふたつ目の研究所ができた、という印象をもつ」<sup>(35)</sup>と述べ、シベリア支部・細胞学=遺伝学研究所のレゾン=デートルに疑義を表明した。これを受け取った『プラウダ』編集部は科学アカデミー・シベリア支部長のラヴレンチェフにシゾフへの回答を依頼した。ラヴレンチェフは、9月25日付でシゾフへの反論をシゾフ本人にたいして送付した。ラヴレンチェフは、まず、シベリア支部 (Сибирское отделение) が他の支部 (филиал) と違い、研究課題を“地域的課題”に限定していないことを伝えたのち、「研究所の構成とその所長の最終的決定は関連する科学アカデミー諸部、総会の推薦によって採択され、政府によって確認されています。生物学とそれに近接する科学の専門家は細胞学=遺伝学研究所の設立を、その他の研究所の設立と同様、合目的であるとみなしています」と手続き論で批判をかわした<sup>(36)</sup>。

## (2) 党中央委員会 “生物学委員会”

当然ながら、ルイセンコはシベリアに新設された“ドゥビーニンの研究所”の著しい拡充ぶりを看過できなかった。彼はフルシチョフに権力のより一層の介入をもとめた。1959年1月、党中央委員会農業課科学セクター主任であったA.G. ウテーヒン (А.Г. Утехин: 名・父称, 生没年不詳)、

ルイセンコ派で1960-62年にはソ連邦農業相をつとめるミハイル・オリシャンスキー (Михаил Александрович Ольшанский: 1908-1988)、それに先述のヌージンなどをメンバーとする党中央委員会“生物学委員会”が組織され、科学アカデミー・シベリア支部の指導部を尋問する目的でノヴォシビルスクの学術研究都市、アカデムゴロドークに派遣された。この“委員会”には、科学アカデミー・シベリア支部幹部会ビューロー [一般にビューローとは、常設機関中の主要メンバーによる公式・非公式の打ち合わせ機関を言う - 筆者] のメンバー、ラヴレンチェフ、チモフェイ・ゴルバチョフ (Тимофей Фёдорович Горбачёв: 1900-1973, 鉱山学者, 1957-1972, シベリア支部副支部長)、アンドレイ・トロフィムーク (Андрей Алексеевич Трофимук: 1911-1999, 地学者)、そしてドゥビーニン本人らが対応した。以下、しばらく、科学アカデミー・シベリア支部学術文書館に保管されている当日の速記録<sup>(37)</sup>を見てみよう。

本題にはいってすぐ、“委員会”側のオリシャンスキーが「委員会は、遺伝学的方向性は[農業の生産力向上には - 引用者] 成果が少ないこと、および、若い人たちのことを考えると、彼らに生物学的諸問題の解決に2つのアプローチ [ルイセンコ派の“ミチューリン生物学”とドゥビーニンらの分子生物学的な遺伝学 - 引用者] があると詳しく知らせることには成果が少ない [“ミチューリン生物学”だけで充分、という意味 - 引用者] と公式にはみなしているし、この研究所とその周辺に存在するアプローチを原理的に共有することはありません。… (中略) … 生物学をこのような、ありえるべき単一の方向性 [ドゥビーニンらの分子生物学的な遺伝学 - 引用者] に独占的に委ねることは正しくありません。科学のさらなる発展にとって十分に展望があると思っはなりません(п.3)」と述べた。ここで奇妙なことは、しばしば生物学、農学の分野で“真理の独占”者になったと評されるルイセンコの側から、自身の“真理の独占”を棚に上げながらも、科学研究における“独占の打破”が訴えかけられたことであろう。ラヴレンチェフはすばやく、「つまり、科学のもうひとつのアプローチ [“ミチューリン生物学”のこと - 引用者] を強化する、という

ことですか(π.3)」と問い返す。オリシャンスキーはただちに「そうです(π.3)」と返答する。ラヴレンチェフのさらなる回答は一種のマヌーヴァーである；「問題はすべて、狭かったとういこと、つまり、今も必要な面積が欠けているということにあります。他のアプローチをとる人々はここにやって来てすぐに仕事にかかれるよう、わたしたちを援助することが必要です(π.4)」。ゴルバチョフが「あなたがたが推薦した博士たちはみな採用しました(π.4)」と援護した。

ヌージンが「2つの方向性は存在します。わたしはその両方にシンパシティーをもっています(π.5)」と述べると、すかさずトロフィムークが「しかし、両者にはちがったレットルが貼られています(π.5)」と反論した。シベリア支部の側は、ルイセンコ側が持ち出した科学の“ブルーリズム”に強いわだかまりをみせる。ラヴレンチェフは、「ノヴォシビルスクに科学のセンターを設立するという問題は、…(中略)…多くの部分では、有害きわまりない企てとみなされました。ここに来ようとした若者は、そうすることを思い留まらせられました。わたしたちは要員確保のためたいへん苦勞しました。率直に言いましょう。わたしがA.N.ネスメヤーノフからニキータ・セルゲイヴィッチ[フルシチョフのこと-引用者]との会話について聞いたときのことを…彼は『あなたがたのところには誰も行かないでしょう』と言いました。この会話にはA.V.トプチェフもいました。この会話はわたしたちをたいへん苦しめました。こうした会話を使って、あなたがたはわたしたちを大きなイボをいじるように攻撃しました(π.6)」と、権力を傘にきたルイセンコ派のやりかたにたいするルサンチマンを吐露した。

“委員会”側のパーヴェル・ゲンケリ(Павел Александрович Генкель: 生没年不詳。植物生理学者)は、自分たちの要望を次のようにまとめた；「研究所長を解任する用意は誰にもありません。彼は働かなければなりません。採択することはわれわれの仕事ではありません。わたしたちは方向性を詳しく知らなければなりませんでした。この方向性はミチューリンのやり方に反するものです。112名(一部はモスクワとハリコフにいるが)が

働いていますが、このなかにはミチューリン的方向に立つ戦闘的な同志はいません<sup>(38)</sup>。…(中略)…ニコライ・ペトロヴィッチ[ドゥビーニンのこと-引用者]がみずからの力をひとつの方向にだけ振り向けるのは、まったくではないにしても、良くは響きません(π.10)」。ウテーヒンが続けて、「わたしたちは、細胞学=遺伝学研究所の職員に生産に必要な成果をより早く入手するよう呼びかけています(π.10)」とつけ加えた。科学研究における“ブルーリズム”，すなわち、ルイセンコ派にもシベリア支部の細胞学=遺伝学研究所にしかるべき活躍の場を設け，“ミチューリン農法”に学び農業生産性の向上策を図るのであれば、ドゥビーニンの所長職からの解任などは要求しない、というのである。

しかし、オリシャンスキーはより過激である。彼は「わたしは研究所の方向性を、そこに起因するすべての結果ともども、方法論的に誤った立場に立つものだと言ったのです(π.10)」と、研究所の方法論的な方向性の転換を要求した。これにたいし、ラヴレンチェフは「『方法論的に誤った』とはどういう意味ですか。…(中略)…砂糖大根の、砂糖の生産を増やす——生物学者はこの問題に正しくアプローチしているでしょうか。他の方法でもできるのではないのでしょうか(π.10, 11)」と方法の多様性を主張する。オリシャンスキーは「観念論によってなされたことのすべてがばかげているとは言えません。しかし、科学は無条件に唯物論的な方法の基礎のうえに実り多く発達するでしょう(π.11)」と切り返すが、さらなるラヴレンチェフの指摘に、「利益をもたらす方法ならどんなものも否定するわけではありません(π.11)」と回答し、以降は沈黙した。

ドゥビーニンがまとめにかかる；「わたしはアカデミー会員オリシャンスキーの見方、つまり研究所を閉鎖せよという意見をウテーヒン同志が支持していないことを嬉しく思います。つまり、わたしたちの仕事は続けられなければなりません。ご意見はすべて考慮に入れましょう(π.12)」。ラヴレンチェフが続けて、「第26回党大会のあと、わたしたちはすべてのテーマ別計画を見直します(π.12)」と約束し、ウテーヒンが「研究所は重要

なテーマを4~5もっていなければなりません。ひとつは所長、もうひとつは副所長、のこりは科長たちに分け、成果を観察し、これらの仕事在日常的なコントロールのもとに置かれるようにしなければなりません(п.12)」とふたたび科学研究の“ブルーリズム”を強調して、協議を終えている。

## おわりに

ソィフェル<sup>(39)</sup>もゲローヴィッチ<sup>(40)</sup>もルイセンコ覇権の終焉に果たした指導的な物理学者の役割には留意しているが、彼らの奮闘の動機については、主としてソヴィエト科学の“脱スターリン化”にこれをもとめているように思われる。

しかしながら、1950年代半ば、相対立する超大国が水爆を含む核兵器を大量に保有している状況下、核戦争勃発の危険性が著しく高まっていた状況において、「放射線の生体への影響」研究は、両超大国にとって国家的意義をもつ研究課題であったのであり、軍事目的、平和目的いずれにせよ、大なり小なり原子力開発計画に関与した物理学者にとって、この課題の緊急性は自明のことであったと見るべきであろう。

放射線研究は急速にすすめられ、1959年になると、そうした研究の成果のひとつとして、原子力関係の書籍出版を扱うアトムイズダート社から、『核兵器実験の危険性に関するソヴィエト科学者の意見』と題する研究論集が出版された。序文は、クルチャートフが寄せ、ドゥビーニンが「放射線と人間の遺伝」という論文を、アンドレイ・サハロフ（Андрей Дмитриевич Сахаров：1921-1989：1975年、ノーベル平和賞受賞）が「核爆発による放射性炭素と閾値外の生物学的影響」という論文を寄せている<sup>(41)</sup>。

1955年以降のソ連邦科学アカデミー幹部会の議事録・速記録を追うと、当時のソ連邦における指導的な科学者がこうした放射線研究をどれほど重要視していたのかがわかる<sup>(42)</sup>。

しかし、同時に1950年代半ば・後半は分子生物学の爆発的な発展が世界的に見られた時期でもある。ドゥビーニンをはじめとする生物学者たちは、放射線研究の枠を超えて、より一層広範な領域で

の基礎研究を渴望する。こうして誕生した“ドゥビーニンの研究所”、すなわち、ソ連邦科学アカデミー・シベリア支部細胞学=遺伝学研究所は、放射線遺伝学・細胞学をひとつの要素としつつ、それに限定されない幅広いテーマを扱う巨大な研究機関となった。その後、分子生物学はソ連邦共産党第22回大会で採択された新しい綱領に位置づけられ、重視されるようになる。この大会を受けて1962年5月11日に開催された科学アカデミー幹部会ではエンゲリガルドを長に68名のメンバーからなる学術会議が設置され、強化策が立てられることとなった<sup>(43)</sup>。

ソィフェルもメドヴェージェフも、苦悩に満ちたソヴィエト農業の史的展開とルイセンコ覇権の問題とを関連づけて検討している。もちろん、そうした見方に間違いはないが、戦後のソ連邦は核時代の冷戦を闘う当事者であり、その科学者もありうべき核戦争への対応を求められていたことも考慮に入れなければならない<sup>(44)</sup>。こうした視点に立って見るとき、最新の分子生物学の成果を基礎とする「放射線の生体への影響」研究は、同時代人には自明の緊急性をもった課題であった。こうした強力な流れの前には、ルイセンコ派による生物学分野における“真理の独占”など、些細なことであったに違いない。ルイセンコ派の側にあってもそうした背景は十分に理解できたがために、“ドゥビーニンの研究所”の閉鎖やドゥビーニンの解任までは要求できず、せいぜい科学研究の“ブルーリズム”を楯に、生物学の新しい方向性と自分たちの学派との「共存」を訴えるしかなかったのであろう。

その後の経過について述べておきたい。ルイセンコがフルシチョフの寵をえることに成功したあと、1963年2月1日、科学アカデミー幹部会と生物科学部による拡大会議が、その直前のソ連邦共産党中央委員会とソ連邦閣僚会議の合同決定「生物学の一層の発展とその実践との結びつきの強化に関する諸方策について」と題する布告を受けて開催された。その決定のなかでは生物学の“ミチューリンの方向性”が再度高く評価され、全部で135件掲げられた研究課題の多くがミチューリン農法にもとづくものであったが、うち6件は直

接ルイセンコ本人、ないしそのごく近いグループの研究者によって担われることになった<sup>(45)</sup>。4時間に及んだ当日の会議では、さまざまな研究機関の代表が次々に登壇し、“ミチューリン的方向性”にもとづく成果について報告していった<sup>(46)</sup>。科学アカデミー総裁ムスチスラフ・ケルドゥイツシュ（Мстислав Всеволодович Келдыш：1911-1978：1961-1975、総裁）が結語で、「ここで進められた討議は、わたしたちが利用する生きた世界の対象が多様であるだけ、生きた世界の利用法や研究へのアプローチもそれだけ多様だということを、鮮やかに示したと思います<sup>(47)</sup>と科学研究のプルーラリズムを強調したことだけが、ルイセンコ覇権を憂う科学者の精一杯の抵抗であったのであろう。おしゃべりなカピッツァも4時間沈黙を守った。ドゥビーニンも発言していない。主要な登場人物でもうひとり沈黙を守った人物がいた。トロフィム・ルイセンコその人である。ルイセンコ覇権の終焉は順調に進んだわけではなかった。

## 注

- (1) 1946年5月30日、科学アカデミーはその幹部会で遺伝学研究所（所長はルイセンコ）とは別に、「細胞遺伝学研究所」を新たに設立する案を策定していた。また、1947年11月にはモスクワ大学で、1948年2月には科学アカデミー生物学部で、“ルイセンコ学説”に関する批判的検討会が開催された。しかし、こうした流れは、ルイセンコがスターリンを味方に引き入れることに成功するやいなや、まったく逆転してしまい、1948年夏には、ルイセンコの生物学・農学分野全般にわたる君臨をもたらした、悪名高いV.I.レーニン名称全連邦農業科学アカデミー・8月総会を迎える。この間の経緯については、拙著『冷戦と科学技術—旧ソ連邦 1945-1955年—』（ミネルヴァ書房 2007年）の141,142ページに記しておいた。
- (2) 旧ソ連邦における代表的な文芸誌『新世界』1953年12月号に作家ヴラジーミル・ポメランツェフ（Владимир Михайлович Померанцев：1907-1971）の論文「文学における誠実さについて（“Об искренности в литературе”，«Новый мир». №12, 1953. cc.218-245.）」が掲載され、文学的描写における過剰な類型化を批判し、よりリアルな創造が呼びかけられた。1954年には党の理論誌『コムニスト』にも、公式主義を排し、人文・社会学者に「創造的議論」を呼びかけた無署名論文「科学と実践（“Наука и жизнь”，«Коммунист» №3, 1954. cc.3-13.）」が掲載され、旧ソ連の知識層の間に“雪解け”の機運が広がっていく。
- (3) B.H. Со́йфер, «Власть и наука : разгром коммунистами генетики в СССР». Изд-во. “ЧеРо”, 2002. cc.829-835.
- (4) Там же, стр.860.
- (5) Там же, стр.848.
- (6) Slava Gerovitch, *From Newspeak to Cyberspeak: A History of Soviet Cybernetics*. The MIT Press, 2002. pp.183,184：なお、「300人の手紙（“Письмо трёхсот”）」本文は、Под ред. А.Ф. Киселёва и Э. М. Щагина, «Хрестоматия по отечественной истории (1946-1995)»(Изд-во “Владос”, 1996.) cc.458-460に見ることができる。
- (7) Zhores A. Medvedev, *The Rise and Fall of T.D. Lysenko*, Colombia University Press, 1969: 邦訳がある（メドヴェージェフ著、金光不二夫訳『ルイセンコ学説の興亡』河出書房新社 1971年）。
- (8) ソ連邦における科学者の権力との関係は、従来しばしば指摘されてきたような単純な二項対立的図式に置換できるようなものではなく、複雑な諸要因が機能していたと考えられるようになってきた。たとえば、近年の旧ソ連邦史研究の全般の特徴は、ノーヴ（A. ノーヴ／邦訳『ソ連の経済システム』晃洋書房 1986年）が先駆的に提起した“集権的多元主義”とも呼びうる旧ソ連邦社会の理解が支持を集めつつあることにあるが、科学史の分野においても旧来の、科学者（集団）と党／政府官僚との関係についてより多元主義的な解釈が有力になってきている（注6に掲げたゲローヴィッチの労作のほか、N. Krementsov, *Stalinist Science*, Princeton University Press, 1997; A. B. Kojevnikov, *Stalin's Great Science: The Time and Adventures of Soviet Physics*. Imperial College Press, 2004.,などを参照のこと）。
- (9) ロシアにおける文書館文書は、一般に、「フォンド（Фонд：Φ：ストック）」、「オーピシ（Опись：Op.：目録）」、「ヂェーロ（Дело：Д：ファイル）」

- という3層の区分に従って整理されている。本稿ではロシア科学アカデミー文書館（Архив Российской Академии наук：以下，Архив РАНと略す），およびロシア科学アカデミー・シベリア支部学術文書館（Научный архив Сибирского отделения Российской Академии наук：以下，НАСО РАНと略す）所蔵の資料を活用しているが，引用した文書館資料がこの文書館のどのフォンド，どのオーピシ，どのチェーロに整理されているかをそれぞれの引用注に示しておく。その際，л，ないし，лл.はシート番号を示す。なお，文書館資料については，報告作成者名，執筆者名をイタリックで示すことはしていない。また，旧ソ連邦の科学者については，わかる限り，その初出箇所での名前の原綴り，生没年をしめしておいた。
- (10) 早くも，1949年11月10日，ソ連邦国連代表=アンドレイ・ヴィシンスキー（Андрей Януарьевич Вышинский: 1883-1954）は第4回国連総会でソ連邦における“原子力の平和利用（この場合は原爆の平和利用）”計画を打ち出していた（*V. Вовуленко* “Вступительная статья” //Дж. Аллен, «Атомная энергия и общество». М., 1950. сс.5-19.）が，みずから核保有国となった旧ソ連邦は国内外の世論形成を目的に，原子力がもたらす科学・技術の燦然と輝く未来を宣伝してゆくことになる。1952年10月5日，全連邦共産党（ボ）第19回大会においてゲオルギー・マレンコフ（Георгий Максимилианович Маленков: 1902-1988）政治局員は原子力の平和利用を称揚した（ソヴェト研究者協会編訳『ソヴェト同盟共産党第19回大会議事録』五月書房 1953年，154ページ）。さらに，当時ソ連邦で一般に普及していた科学啓蒙誌『知は力』誌には化学博士候補セレーギンなる人物の手になる論説「平和目的のための原子力」が掲載された（*A. Серегин*, “Атомная энергия для мирных целей.” «Знание – сила»№3, 1953г. сс.27,28）。翌年5月にはコムソモール（V. I. レーニン名称共産主義青年同盟）の機関誌（のひとつ），『青年の技術』に，さらに翌々年2月には当時人気を誇った文芸誌『新世界』にも原子力の平和利用や原子炉をテーマとした記事（*K. Гладков*, “Ядерные реакторы”, «Техника молодёжи»№5, 1954г. сс.23-29; *И.Абрамов*, “Пути развития советской техники” «Новый мир» №2 1955, сс.206-217）が組まれるようになった。
- (11) «Сессия Академии наук СССР по мирному использованию атомной энергии. 1-5 июля 1955г.» в 5 тт. Изд-во АН СССР, Москва, 1955г.
- (12) *Л.А. Орбели*, “Действие ионизирующих излучений на животный организм.” Там же, Т. 2, стр.3：なお，訳文は邦訳（ソヴェト科学アカデミー篇，産業経済研究所訳『原子力平和利用会議報告論文集・生物学編（普及版）』アトム社 1957年，15ページ）に従った。この邦訳書については大阪教育大学の鈴木善次名誉教授からご教示を受け，現物をお貸しいただいた。日本語版には茅誠司（日本学術会議会長），湯川秀樹のほか，実際にこの会議に招かれ，列席した藤岡由夫が序文を寄せている。わが国でもこの方面の研究に相当の関心が寄せられていたことが推察できる。鈴木先生に感謝したい。
- (13) Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 201. лл. 138-140: サマーリンの発言はл.140.
- (14) Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 221. лл. 30-96, 196: この研究室の主任にはドゥビーニンが任命された。なお，翌1957年，ニコライ・セミョーノフ（Николай Николаевич Семёнов: 1896-1986. 1956年，ノーベル化学賞受賞）は自身が所長をつとめる科学アカデミー・化学物理学研究所のなかに生物化学科を新設し，遺伝学者で，ページされていたヨシフ・ラポポルト（Иосиф Абрамович Рапопорт : 1912-1990）をその長に招いている（*Соифер*, Указ. соч., в примечании (3), стр.850）。
- (15) 中川保雄『〈増補〉放射線被曝の歴史 —アメリカ原爆開発から福島原発事故まで—』（明石書店 2011年）の70-90ページを参照のこと。
- (16) Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 263. л. 32.：このパリの国際会議には1,171人が参加し，206本の報告が討議されている。ここでのソ連邦・ウクライナ・白ロシアからの報告件数は49本と，数の上だけからは，フランスからの33本，アメリカからの31本，イギリスからの29本を上回っていた。なお，この国際会議に先立ち，1957年4月4~12日には，前年8月2日付のソ連邦閣僚会議指令№4705にもとづき，科学アカデミーと政府の原子力利用総管理部（Главное управление по использованию атомной

- энергии：先述の「原子力工業総管理部」と同一機関かどうかは不明）とによって、「放射性・非放射性アイソトープと放射線の国民経済と科学における応用に関する全連邦科学・技術会議」が開催され、1,016の機関の代表3,000人以上が集まり、計444本の発表を聞いている（Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 244. лл.179, 193）。しかしながら、パリにおける「科学研究への放射性同位体元素応用に関する国際会議」の時点で実際に研究が進められていたのは、高分子の重合、グラファイト・ポリマーの生産などのために放射線を応用する工業的方法の研究ぐらいで、それも研究室の規模を超えていなかった（Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 263. л. 32）。
- (17) Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 264. л. 115.
- (18) Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 230. лл. 160-178: なお、この件については、拙稿「ソヴィエト科学の“脱スターリン化”と科学アカデミー—1953-1956年のソ連邦科学アカデミー幹部会議事録・速記録から—」（『広島大学大学院総合科学研究科紀要Ⅲ 文明科学研究』2011. 12. 1～12ページ）で詳述している。
- (19) Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 240. л. 8.
- (20) Там же, л.79.
- (21) Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 243. лл.58-60, 223.
- (22) Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 277. лл.10-12.
- (23) Там же, лл.54,94.
- (24) Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 268. лл.124, 125.
- (25) Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 248. л.9.
- (26) Там же, л.124.
- (27) НА СО РАН Ф.4, Оп.1, Д.1. л.27.
- (28) 1958年初の研究所人員は101名、研究室面積は400m<sup>2</sup>であったが、1年後には人員も面積も倍加することが計画されていた（НА СО РАН Ф.10, Оп.3, Д.6. л.172.）。
- (29) 引用は、Там же, лл.171, 172.から。
- (30) НА СО РАН Ф.10, Оп.3, Д.20. лл.9,10.
- (31) たとえば、1956年6月14日付党中央委員会科学課長ヴラジーミル・キリーリン（Владимир Алексеевич Кириллин: 1913 -1999）宛書簡、および7月5日付党中央委員会書記ミハイル・スースロフ（Михаил Андреевич Суслев: 1902-1982）宛書簡では科学アカデミー・生物科学部の紀要編集委員会の人事交替に猛烈に抗議している（Архив РАН Ф.201, Оп.1, Д. 279. лл.38-40）。また、11月21日の科学アカデミー・遺伝学研究所学術会議では、『一般生物学（«Общая биология»）』誌に掲載された細胞学・微生物学の専門家、ドミートリー・ペトロフ（Дмитрий Фёдорович Петров: 1909-1987）の論文「遺伝性の物質の本質に関する問題に寄せて（“К вопросу о материальной природе наследственности”）」を反唯物論的で反科学的であると非難し、資料を党中央委員会印刷課と科学アカデミー幹部会に送付することを決定している（Там же, л.49）。
- (32) Архив РАН Ф.201, Оп.1, Д. 284. л.8.
- (33) Архив РАН Ф.201, Оп.1, Д. 307. л.16.
- (34) Архив РАН Ф.201, Оп.1, Д. 305. лл.1-3：ヌージンの発言の紹介はл.3。なお、このコンファレンスには、ドゥビーニン、イヴァン・シュマリガウゼン（Иван Иванович Шмальгаузен: 1884-1961）など反ルイセンコ派生物学者、物理学者カピッツァ、それに、マルク・ミーチン（Марк Борисович Митин: 1901-1987）、アレクサンドル・マクシーモフ（Александр Александрович Максимов: 1890-1976）、アブラム・デボーリン（Абрам Моисеевич Деборин: 1881～1963）など一連の哲学者も招待されていた（Там же, лл.38, 39）。
- (35) НА СО РАН Ф.4, Оп.1, Д.62. лл.24,25.
- (36) Там же, л.21.
- (37) НА СО РАН Ф.10, Оп.3, Д.59. лл.1-13：以下、本資料からの引用は、その都度本文中にシート番号をしめすことにする。
- (38) さきほどのチモフェイ・ゴルバチョフの「あなたがたが推薦した博士たちはみな採用しました（л.4）」との発言と明確に食い違っている。どちらが正しいのか、実態はどうであったのか、は不明である。
- (39) См. *Сойфер*, Указ. соч., в примечании (3), сс.864-867: ソイフェルの場合は、物理学者による“生物学正常化”要求と「放射線の生体への影響」研究との関連を指摘してはいるが、個々の物理学者の関心としての把握にとどまっている。
- (40) See, Gerovitch, *Op.cit.*, in note (6), pp.183,184.
- (41) Под общ. ред. А.В. Лебединского, «Советские

учёные об опасности испытаний ядерного оружия», Атомиздат 1957г.: なお、ドゥビーニン論文の原題は、*Н.П. Дубинин*, “Радиоакция и наследственность человека (с.82-89)” サハロフ論文の原題は、*А.Д. Сахаров*, “Радиоактивный углерод ядерных взрывов и непороговые биологические эффекты (с.36-44)”である。本書は学術書であるにもかかわらず、初版25,800部を数えている。こうした放射線生物学の飛躍的強化の背景には、おそらく、1957年9月29日に生じたウラル地方の核兵器製造施設群、「チェリヤピンスク-40」における大規模な放射線被曝事故、いわゆる“ウラルの核惨事”など、当時の核関連施設における放射線被曝の多発が影響しているであろう。この関係を直接に示す資料を見いだすのは今日でも困難であるが、ジョレス・メドヴェージェフは“ウラルの核惨事”の影響について、「事件は悲劇的なものであったけれども、さまざまな濃度レベルをもった放射性物質を含むこのように広範な汚染地帯が存在することは放射線生態学、放射線遺伝学、放射線生物学、放射線毒物学などの分野の科学研究にまたとない機会を与えてくれるものであった。1958年から1960年にかけてソ連の非常に多くの実験研究室、研究所、各種のセンターでは放射性同位元素や放射線の軍事利用および平和利用に関する研究がおこなわれていた。… [中略] … 放射線で汚染された広大な自然の領域が突然に出現したことで、何千人もの研究者は外国に前例のないような全く新しい機会とユニークな展望を与えられたのである」と述べている（ジョレス・A・メドヴェージェフ、梅林宏道訳『ウラルの核惨事』技術と人間社 1982年、36ページ）。

- (42) こうした努力にもかかわらず、1962年7月8日に開催された科学アカデミー幹部会では放射線生物学の“決定的な”立遅れが指摘されることになる（Архив РАН Ф.2 Оп.6а, Ед. хр.198. лл.8,9）。
- (43) Архив РАН Ф.2 Оп.6а, Ед. хр.197. лл.13,21.

(44) もちろん、こうした課題は多くの科学者が求めていたであろう“研究の自由”の保証と矛盾するものではない。先に述べた1957年12月6日の幹部会の席上、カピッツァは、「ここで思うのは、科学者が自由に語り合える可能性をもっているケンブリッジやオックスフォードの経験を、こうした問題[放射線の生体への影響—引用者]の解決に適用することが不可欠だ、ということです。わたしは、この問題で人々が集まり、語り合うクラブを組織することはできても、それは人々が自由に交流するときに初めて可能になると思います。ところが、わたしたちのところには、このような自由な交流はありません。わたしたちは、自分の研究所で忙しい仕事に疲れて、会議の場だけで出会うのですが、そこで語ることもできても、報告者が邪魔をしてくるのです」と述べ、進行中の物理学、化学、生物学の協同に期待していた（Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 264. л.132）。

(45) Архив РАН Ф.2 Оп.6а, Ед. хр.204. лл.10, 27-83.

(46) Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 264. лл.159-302.

(47) Там же, л.298.

## 附 記

本稿は、平成22~24年度・日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（B）「“科学の参謀本部” —ロシア／ソ連邦／ロシア科学アカデミーの総合的研究—」[研究代表者—市川 浩：課題番号22500858]による研究成果の一部である。

## 謝 辞

貴重な資料を貸与していただいた鈴木善次・大阪教育大学名誉教授、ならびに、投稿前の本稿に目を通し、貴重なアドバイスをいただいた藤岡毅博士（同志社大学嘱託講師）には厚くお礼申し上げます。